

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號二第 卷一十第

論 說

德川時代の税制……………法學博士 瀧本 誠一

基礎社會の發達方向(一)……………文學士 高田 保馬

租税の限度に就きて(二・完)……………法學博士 神戶 正雄

鎌倉時代の家族制度(七・完)……………文學博士 三浦 周行

マルクスの勞働價值論の根本命題(一)經濟學士 堀 經 夫

時事問題

經濟界不安の繼續……………法學博士 戸田 海市

超過所得税論……………法學博士 小川郷太郎

雜 錄

現代支那に於ける社會上の一缺陷……………文學士 小島 祐馬

收穫遞増減の諸觀點……………法學士 石川 興二

ラレーの「和蘭貿易に關する考察」……………法學士 山口正太郎

近刊の經濟史に關する三著述……………法學士 本庄榮治郎

雜誌

現代支那に於ける社會上の一缺陷

小島 祐馬

現代支那の社會に於いて男女人口數の不均等なる現象の存することは、これまで支那研究者によつて多少注意せられた所であるが、而も未だ此點に就きて特に根據ある研究を試みたるもの有るを聞かなかつた。頃日海軍少佐有馬成甫氏が『支那人社會の性的缺陷』と題する一論を公にし、右の事實に關して頗る組織的なる研究を試みられたることは、現在の支那を研究する者にとりて參考に資すべきもの尠からず、且それが現在支那の社會問題に觸れて居るといふ點に於いて、支那新人の注目を値するものがあら

うと思ふ。此論文は本年一月に出版して之を同好者に頒ち、更に本年六月に之を『日本心理學雜誌』(第一卷第四號)に登載したものであるが、其之を知るもの猶甚少數の人士に限られて居るが如く思はるゝを以て、茲に其所説の概要を紹介し、且それに就きて簡單なる批評を加へて置かうと思ふ。

著者は先づ支那に於いて女が尠いといふ事實を諸種の統計によつて立證して居る。尤其統計を利用する上に於いて支那政府の調査に成る人口表などは杜撰にして確實性に乏しきものと爲し、主として日本人の調査に成る關東州に於ける租借地内支那人の戸口狀態に本づきて支那内地の狀態を類推し、同時に傍證として支那政府の調査に成る支那内地の戸口狀態を引用せるものである。

先づ關東都督第十二統計（大正六年末）による各管内及び各市街地に於ける男女別人口調（註二）により、男女數に著しき差異あることを示したる後、此には出稼労働者の來住によつて生じたる男子の超過數を含むものなることを注意し、更に一層精細なる研究を遂ぐる爲めに職業別より觀たる男女數（註三）、年齢別より觀たる男女數（註三）を算出して居る。而して職業別による男女人口表の中に就き、商工業労働者及び僕婢の職業を有する者に在りて男子數の過大なるは主として出稼來住者に因由するものと認むるを得るも、土着住民の主要なる職業たる漁業及び農業に在りても猶女子の數が非常に尠く、假りに漁業及び農業に従事する者が幾分の出稼労働者を雇傭せるものと觀て、男子超過數の半數を出稼人と概算するも、其殘部に於ける男女數には猶可なり大なる差違ある事實をあげて、本來男子の數の優越せることを證明し、又年齢別による男女人口表によりては、一幼年期に在りて

既に男兒の數は女兒より遙に多きこと、（二）二十歳より五十歳に至る年齢の者に在りては男女數の懸隔特に顯著なること、（三）五十歳より六十歳に至る期間は略幼年期に於ける差と同様なること、（四）六十五歳以上は殆んど男女の差なく、之より高齢に進むに従ひ少しく女子の數多くなること等の事實を計出し、二十歳より五十歳に至る男子數の著しき懸隔は出稼労働者の渡來に起因するものと觀るも、幼年期老年期を通じて觀察すれば關東州内土着の住民に於いて猶女子の數の少きことを斷定して敢て不可なしと爲し、且特に其出産の初に於いて既に女子が少く生れるといふ事實を指摘して居る。

以上は専ら關東州に於ける統計を基礎として論ぜしものなるが、著者は更に宣統二年に於ける支那全般の人口調査（註四）及び民國元年に於ける山東省の人口調査（註五）を擧げ、此等の統計に見はれたる男女人口數の懸隔も、亦關東州に於ける調査に一致するものなることを注意し、

斯くて支那には女が少く、而も其少き程度が驚くべき差に達して居るといふことを、從來の漠然たる觀察より稍確實なる基礎の上に持ち來さんとしたものである。

以上述ぶる所に就いて考ふるに、吾人は先づ著者の材料の取扱方が宜しきを得て居り、現在に於いてはそれ以上正確を期する方法の殆んど見出し難きことを認めざるを得ない。支那の統計なるもの、甚信用し難きことは著者も既に注意せる通りであり、且關東州の統計にしても、それが他省の統計に比し、より多く確實といふことは言ひ得んも、猶相手が多く無智の支那人であるだけ十分正確を期し難き點があらうと思ふ。併し細かき數字は兎も角として、單に支那

に於いて現在女子の数が男子の數に比し少いといふ事實のみは、著者の擧げたる材料によりて十分に之を推定し得べく、此點に於いて吾人は先づ著者の勞を多とせざるを得ない。

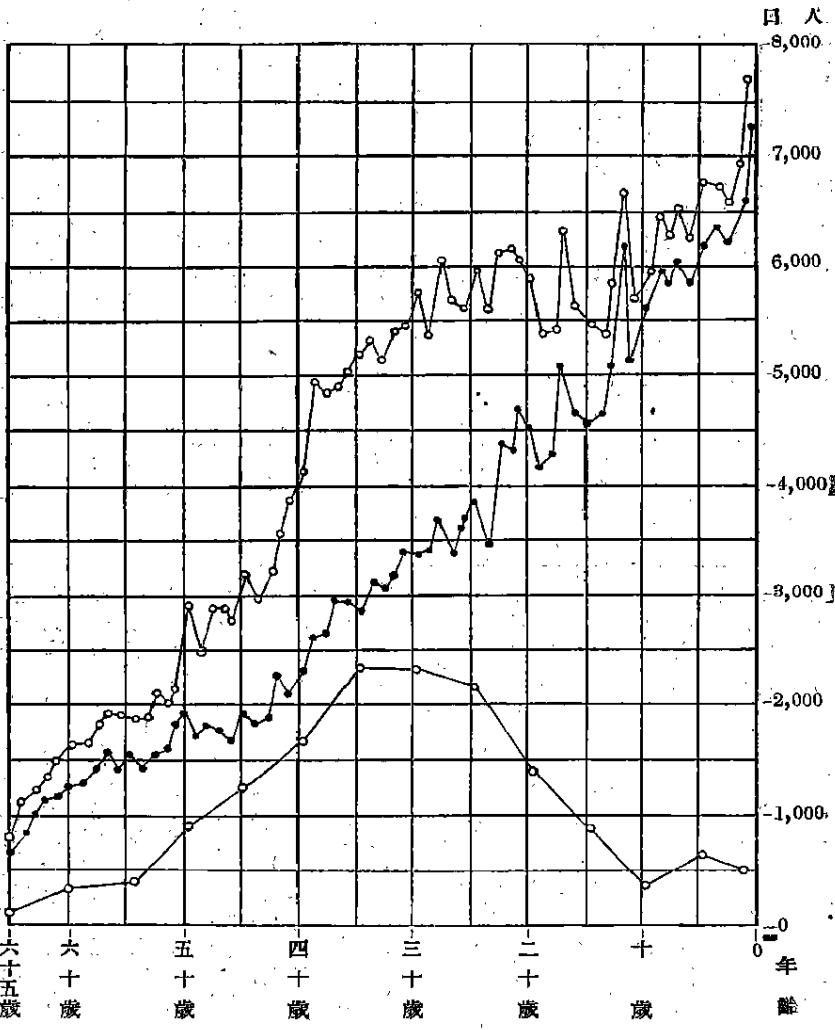
(註二) 關東州各管内支那人人口男女別

地方	男		女		差
	男	女	男	女	
旅順	四九,一四四	三三,八八〇	一五,二六四	一五,九二四	六,六六〇
大連	七六,七四四	五八,八〇〇	一七,九四四	一〇,九〇〇	七,〇四四
金州	四四,一三四	四〇,三三三	三,八〇一	四,八〇一	一,〇〇〇
普蘭店	五九,五三七	五一,八〇〇	七,七三七	七,七三七	〇
總子窩	六二,七〇四	三三,四三三	二九,二七一	一〇,九〇〇	五,三三七
計	三三〇,七三三	二二〇,〇〇〇	一一〇,七三三	一〇,一三一	一〇〇,六二二
市街	男	女	差		
旅順市	四九,七三九	一五,九二四	三三,八一五	一八,〇〇〇	一五,八一五
大連市	七六,〇〇八	一七,九四四	五八,〇六四	一七,〇〇〇	五九,〇六四
金州城内	四四,〇〇〇	四〇,三三三	三,六六七	四,四六七	八〇〇
計	一七〇,七四七	一〇〇,六〇〇	七〇,一四七	二二,四六七	四七,六八〇

(註二) 職業別による男女の數

職業	男	女	差
公務員	四〇	四	三六
自由業	二四〇	一七	二二三
農業	一七,七四四	一,七四四	一六,〇〇〇
漁業	一三,一四〇	一,〇四〇	一二,一〇〇
工業	一六,〇八八	一,〇八八	一五,〇〇〇
商業	三三,〇三六	三,〇三六	三〇,〇〇〇
貿易運送	五,一四四	一,一四四	四,〇〇〇
其ノ他	一,一四四	一,一四四	〇
労働者	四七,〇三六	一〇,〇三六	三七,〇〇〇
僕婢	一,四四四	一,一四四	三〇〇
無業	一,一四四	一,一四四	〇

(註三) 關東州内居住支那人男女別(年齢別)人口表 (六十五歳以下省略)



I-男 II-女 III-比例

雜誌 現代支那に於ける社會上の「缺陷」

第十一卷 (第二號 一一九) 二六九

(註四) 第二回支那各省戶口調査(宣統二年度支那民政部)

一九二一年二月二十七日
宣統二年十二月二十七日

地方名	男	女
北京	1,927,013	1,721,110
順天府	1,927,013	1,721,110
直隸省	11,731,077	10,731,077
吉林省	2,265,038	2,038,200
黑龍江省	1,107,021	977,828
山西省	8,481,428	7,500,912
浙江省	11,000,000	9,900,000
江西省	8,000,000	7,100,000
(註五) 山東省戶口調査(民國元年度)	8,000,000	7,100,000
管城	男	女
四道、百〇七縣	12,721,013	11,721,110

民國政府内務部統計科調

次に著者は然らば何故に支那に於いて斯くの如く女の数が少いかといふ問題に入り、其原因として出産時に於ける男兒數の優越と女兒の人為的淘汰とを擧げて居る。

著者は出産時に於ける男兒數の優越といふことは關東州の調査(註六)にも、又山東省の人口統

計(註七)にも、表はれて居る所であつて、これが支那に於いて女の少い一原因であるといふことは拒むことを得ざる事實なりとし、而して此差異を生ずるに至れる原因の何であるかに至つては、それは生理學上根本的に性の問題が解決せられざる今日に於いて容易に解決を求め得べきものに非ずして、世俗の所謂「富家には女兒多く貧家には男兒多し」とか、或は「文明國には女子多く未開國には男子多し」といふが如き説は固より俄に認容すべきものに非ずと爲して居る次に女兒の人為的淘汰の下に於いては著者は溺子の習俗を擧げて居る。溺子とは古來支那人が嬰兒を殺す方法にして、小兒出産の後直ちに之を水を盛りたる盤中に入れて溺死せしむるものであつて、此方法によりて殺さるゝ生兒の數は男兒よりも遙に女兒に多しといふことである。扱此風俗が果して現在支那の社會に於いて猶行はれて居るかどうかといふことであるが、著者は斯かる事柄は社會の裏面に於いて竊に行はるものなれば、統計等に徴して之を的確に認む

ることを得ざるも、關東州に於ける死産兒の統計を見れば死産が女兒に多く男兒に少き事實あり、固より溺子と死産とは全く異りたる事實にて混同を許さざるも、而も實際上之が辨別は甚困難であつて、實際溺子を死産として届出づるもの、多數あるべきを想像される、されば支那の上流社會に在りてはいざ知らず、支那人口の八割を占むる農民社會貧民社會に在りては今猶此陋習が行はれ居るものと推定して敢て不當であるまいと云ふのである。而して支那の社會に於いて何故にかゝる陋習が馴染されたかといふに其原因としては(一)家族制度の見地より女兒は價値なきものとせられ居ること、(二)女兒は經濟的に獨立し得ずして親の厄介者と見られて居ること、(三)支那人の餘りに打算的なること、及び(四)社會制度の不備なることを指摘して居る。

右の所説に就き少しく吾人の臆見を述べれば著者が溺子の陋習を以て今猶支那に行はるゝものなりとし、それが人爲的に女を少からしむる原因なりと爲せるは、恐らく誤らざる推定であらうと思ふ。然るに吾人は著者謂ふ所の出産時に於ける男兒數の優越といふ事實に就いては聊疑なきを得ない。著者は死産兒の數より端緒を得て、其數の中に溺子の數を見積るといふことを言はれて居るが、吾人は寧ろ生産兒の數の中に溺子(其中には女兒を多數に含む所の)の數が省かれて居ると觀る方が、より多く實際に適合するものに非ざるかと思ふ。即ち溺子は死産兒として届出づるよりも寧ろ嘗て生れざりしものとして全く届出でずに終るものゝ方が大多數に非ざるかと思ふのである。若し果して此推定にして誤らずんば、統計に見はれたる生産兒の數のみによりて出産時に於ける男兒數の優越を言ふことは、或程度に於いて、若くは場合により根本的に、訂正を要することゝ爲り得ないとも限らないと思ふ。

(註六) 關東州内出産及死産男女別

年	出 産		死 産	
	男	女	男	女
大正六年	九二〇	八四八	三	三〇
五 年	八二二	八三三	一六	一六

年	人口	出生數	死亡數	同一年
四年	八,082	3,184	2	2
三年	8,002	3,222	2	2
二年	8,231	3,222	2	10
元年	8,222	3,010	2	2

(註七) 山東全省現在人口及出生并死亡數比較

年	現在人口	出生數	死亡數	同一年
一九二二年	1,222,000	1,222,000	1,222,000	1,222,000
一九二一年	1,222,000	1,222,000	1,222,000	1,222,000
一九二〇年	1,222,000	1,222,000	1,222,000	1,222,000
一九一九年	1,222,000	1,222,000	1,222,000	1,222,000
一九一八年	1,222,000	1,222,000	1,222,000	1,222,000
一九一七年	1,222,000	1,222,000	1,222,000	1,222,000
一九一六年	1,222,000	1,222,000	1,222,000	1,222,000
一九一五年	1,222,000	1,222,000	1,222,000	1,222,000
一九一四年	1,222,000	1,222,000	1,222,000	1,222,000
一九一三年	1,222,000	1,222,000	1,222,000	1,222,000
一九一二年	1,222,000	1,222,000	1,222,000	1,222,000
一九一一年	1,222,000	1,222,000	1,222,000	1,222,000
一九一〇年	1,222,000	1,222,000	1,222,000	1,222,000
一九〇九年	1,222,000	1,222,000	1,222,000	1,222,000
一九〇八年	1,222,000	1,222,000	1,222,000	1,222,000
一九〇七年	1,222,000	1,222,000	1,222,000	1,222,000
一九〇六年	1,222,000	1,222,000	1,222,000	1,222,000
一九〇五年	1,222,000	1,222,000	1,222,000	1,222,000
一九〇四年	1,222,000	1,222,000	1,222,000	1,222,000
一九〇三年	1,222,000	1,222,000	1,222,000	1,222,000
一九〇二年	1,222,000	1,222,000	1,222,000	1,222,000
一九〇一年	1,222,000	1,222,000	1,222,000	1,222,000
一九〇〇年	1,222,000	1,222,000	1,222,000	1,222,000

以上擧ぐる所の出産時に於ける男兒數の優越と女兒の入爲的淘汰は事實上女子の數其者を不足せしむる原因であつて、而して其不足の程度は既に非常なるものと爲して居るのであるが、著者は更に女子の數が實際在るよりもより以上に不足を感ぜしむる社會的原因が支那の社會に現存すと爲し、其最著しきものとして一夫多妻の風尚をあげて居る。而して支那に於いては官吏といはず、商賈といはず、其富の程度に應じて大抵數人の妾を蓄へて居る事實を擧げ、元來蓄妾は家族制度の結果として四十歳に至るも嗣子

なき場合之を許されたるものなるが、今日に於いては其數の多少は社會的地位乃至は財産の多寡を表はず標準と爲つたと言つて居る。猶此外に著者は此等富貴の者の妻妾が身邊の用を辦する爲めに多く貧家の兒女を買受けて婢と爲し、各自之を占有せることや、一人の夫にして二個の家を相續し、兩家に各正妻を有するが如き奇習や、寡婦の再婚が殆んど絶對的に禁せられ居る社會制裁や、或は遊女妓女等も存するも是亦殆んど上流階級の獨占に委せられ居る事實等を列擧し、此等の風俗習慣は元來其數の不足せる女子をして、社會的に非常に不平等なる分配をなさしむるに至れりと爲し、更に次の如き論評を加へて居る。

「現時支那人社會の此等性的缺陷は恰も經濟的缺陷と同様に、富の分配が不公平なるが如く女の分配も極めて不平等である。而して此の兩者の間には實に密接の關係があつて、女の分布狀態は富の分布に全然從つて居ると言つても過言ではなからう。換言すれば錢を獲

れば女が得られ、富を致すの道は女を獲るの唯一手段である。」

叔斯の如き社會上の缺陷は支那人并に支那の社會に如何なる影響を帶來したかといふに、著者は先づ結婚が男子にとりて非常に困難となつた事實を述べて居る。即ち少數の女子を獨占せんが爲めに多數の男子は互に猛烈なる競争をせねばならぬ、而して其競争に打勝つ爲めには經濟的に優勝者と爲らねばならぬと爲し、次の如く述べて居る。

「彼等の勞働に従事するや實に深刻である。勞働者として世界他人種に比類なき特質を具有して居ると稱せられて居るが、これは實に彼等の勞働が人生最大の本能的欲求に出でたる深刻さを持つからである。自己保存と種族保存との二大欲は人間生存の總べてを包含して居るものである。然るに衣食住は彼等にとつて甚だ簡單に獲られる。一塊の餅一衣の裘、能く壽命を繋ぐには十分である。唯餘す所は性的大欲である。彼等は此の問題の解決に死

命を賭して奮闘する。勞働は即ち本問題解決の唯一手段で、従つて其眞劍なる所以も實に茲に存する。」

斯くて支那特有の出稼勞働者の現出も其原因はこゝに存すと爲し、彼等の蓄財癖も亦こゝに原因するものとす。要するに支那下層青年の勤勉努力や克己制欲は、すべて結婚に對する生存競争に打勝ち、以て優勝の位置を占めんとするが爲めに外ならざるものと爲すのである。猶此結婚難の結果として支那に於いては結婚の儀式が一種デモンストラチブのものとなり、又許嫁を急ぐ風習を生じ、或は表面婦女を賤しみながら家庭に於いては妻女の權威に服従し、或は離婚數の著しく少き等の社會的現象を來したものと爲し、更に遊民兵士勞働者の如き多くは結婚問題に對する落伍者にして、無配遇者たる下層民の一社會を形成せるもの、其常に不安定なる状態に在りて騷擾氣分爆發氣分に充ちて居るのも、畢竟は女性の缺乏せる結果に外ならずと觀て居る。

此一段に於いて、著者が支那人の性的缺陷の事實より進んで支那現在の社會問題に關する諸種のヒントを示されて居ることは最吾人の感興を惹く所である。其の支那労働者の労働を解して殆んど其全部が性的欲求に因由するが如く説けるは、稍高調に過ぎたるの嫌なきかと思はるるも、而も其の支那に於いては富の分配の問題の解決が同時に女子分配の問題の解決となることや、支那に於ける婦人問題はそれが單に婦人職業問題に非ずして、更に廣汎なる意義を有すべきものなることや、及び支那に於ける労働問題は一般労働問題とは多少色彩を異にする點がなくてはならず、且其労働問題の解決は一種特別の意味に於いて婦人問題と密接の關係あるものであるといふが如き諸種の暗示を相當力強く示されて居ることは、獨今日の支那の社會を研究するものにとりて興味多き問題を提せられたるばかりでなく、現に支那の労働問題を提唱しながら徒に歐米思想の翻譯をのみ是れ事としつつある支那の青年政治家にとりて、實に有益な

る指針を與へられたものと謂ふべきであらう。著者は以上の事實を述べたる後、最後に之が救済策に入つて居る。先づ以上の事實より歸納して「支那人は女性に對して矛盾せる思想、利害相反する岐路に立つて居る、即ち家系相續者としては之を輕視し、性的配偶者としては之を重んじて居る」と爲し、従つて此缺陷を救済する方法は此矛盾を調和するに在りとして居る。而して之が根本的救済策は勿論經濟制度の改革であつて、之に次いで女子の自覺を進め男子の覺醒を促し、以て支那社會の現狀を根柢より革新するのであるが、前者は本論の目的とする所に非ず、又後者は言ふべくして到底行ふべからざることなりとして共に此等の問題に觸れず、唯現下に於ける對應策として著者は育兒院の設立と婦人の職業教育及び授産事業を起すことの急務を高唱して居る。就中育兒院の設立は古より既に慈善事業として施設する所なきに非ざるも、其内容は甚貧弱にして到底現代社會の

必要に應ずるに足らざるものなれば、此方面に於いても更に大に力を注がざるべからずと爲し、且此の如きは特に我日本人の事業として最相應はしき計劃に非ざるかと注意し、又婦人の職業教育并に授産事業は、我投資工業の發展と共に實施するならば最圓滑なる經濟發展策ともならうと言つて居る。猶又對症的政策として歐洲諸國の過剩女子を以て支那の過剩男子と配するも妙案ならんも、これは事情複雑なる關係あり、且稍突飛に屬するを以て、吾人の特に主張せんとする所ではないと言つて居る。

著者が上述の缺陷を救済するが爲めの應急策として案出せる方法も、亦大體に於いて吾人の異存なき所である。唯婦人の職業教育并に授産事業を我國の經濟發展策と伴はしめんとすることは、そは一石を以て二鳥を打つの策ではあるが併し個人の自由獨立を根本觀念とすべき婦人問題の解決と、侵略的意義を有する今日の經濟發展策とが、いつまで道連れとなり得べきかは疑問である。尤著者は既に此問題の根本的解決

方法は「經濟制度の改革」に在りと言へるを觀れば、茲に謂ふ所の如きは固より單に今日の場合已むことを得ずして一時機宜の處置として之を取らんとするものに外ならざるべく、従つて亦此點に就いて吾人の贅言を須たざるものがあるであらう。猶著者は外國人との結婚獎勵を特に力説せざる所以を述べて居るが、若し著者の言ふが如く出産時に於いて既に男子數の優越せることが事實なりとすれば、男女數の不平均を救ふ方法としてはそこまで進まなければ未だ徹底したものと言ひ得ないかと思はれる。

以上は「支那人社會の性的缺陷」の概要を紹介し、處々に吾人の所感の一端を附記したものである。元來紹介を主としたものであつて、批評に於いては固より未だ盡さざる所あることを免れぬ。猶終に臨み著者が身軍職に居りながら斯かる特殊の問題に着目し、全く學者的態度を以て之を研究し發表せられたることは、學界の爲め吾人の最喜ばしく思ふ所である。(完)